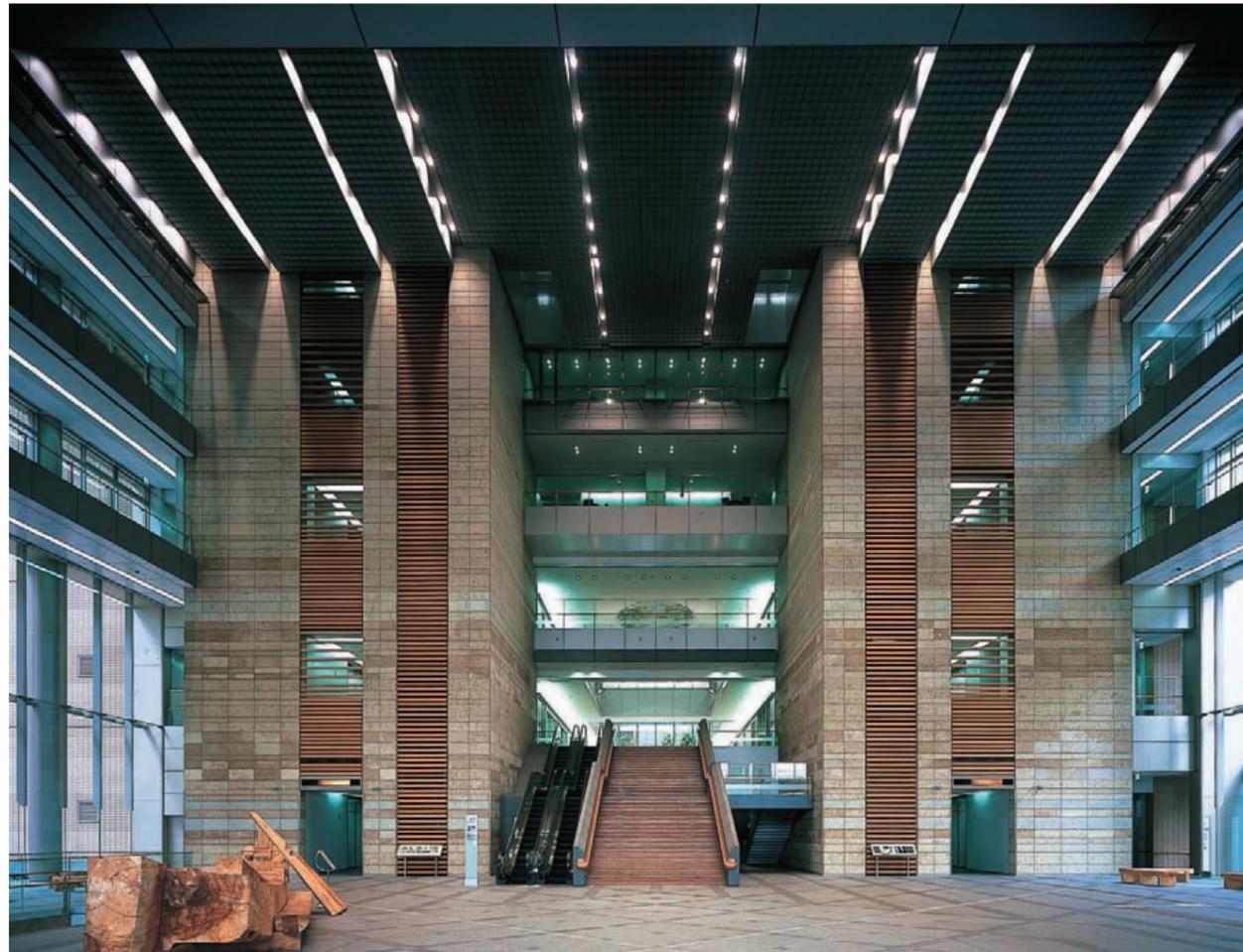


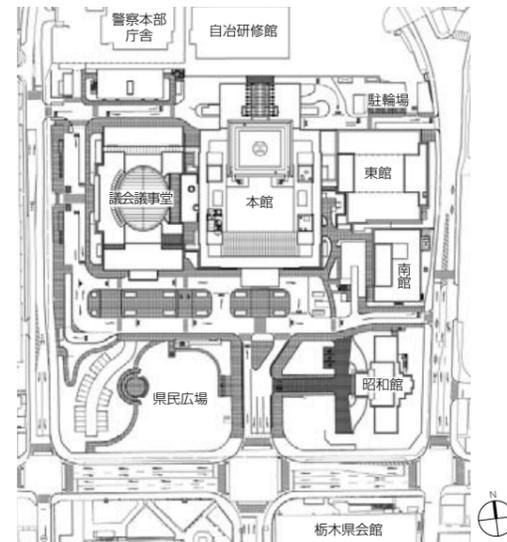
栃木県庁舎

設計：日本設計

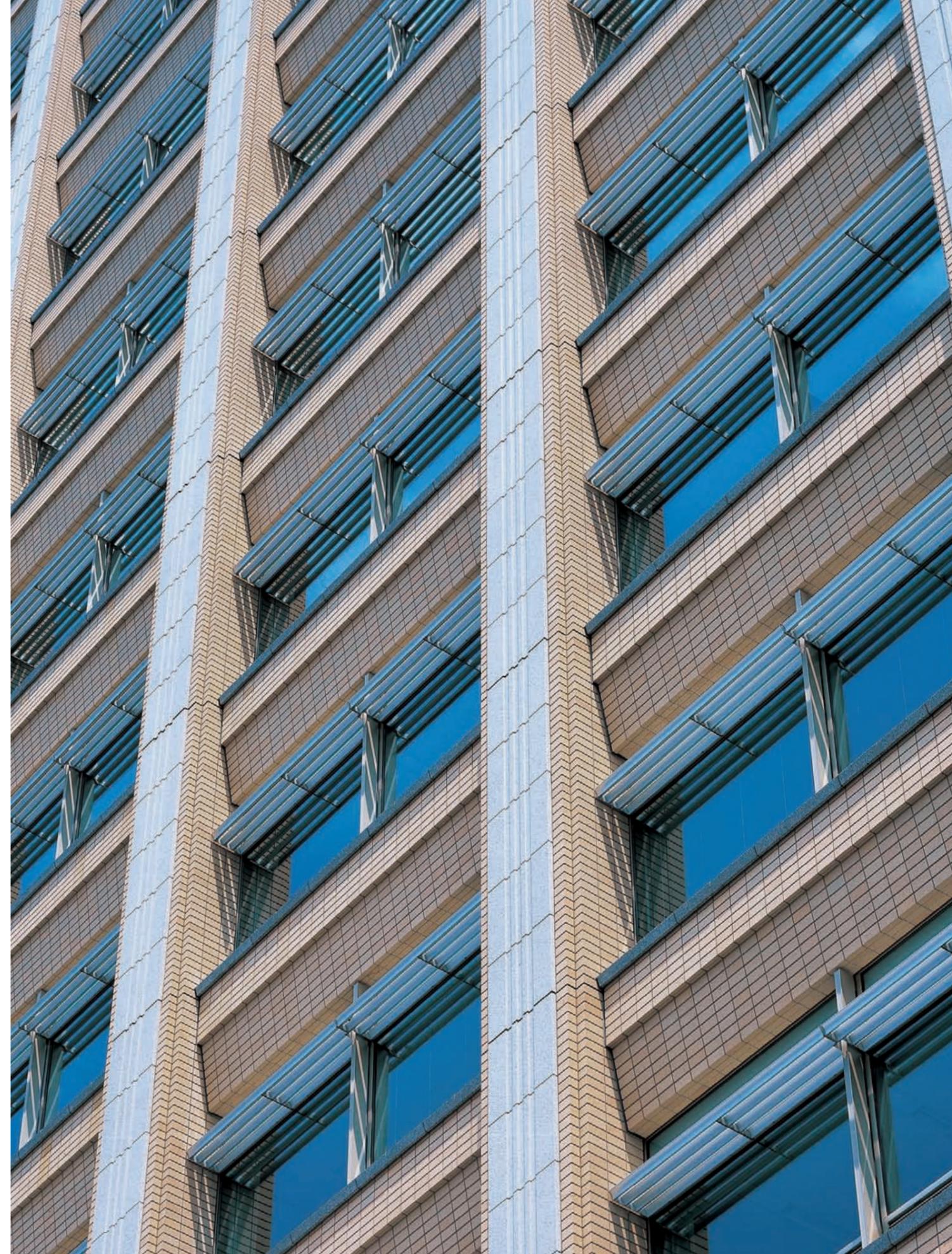
D+T | BE



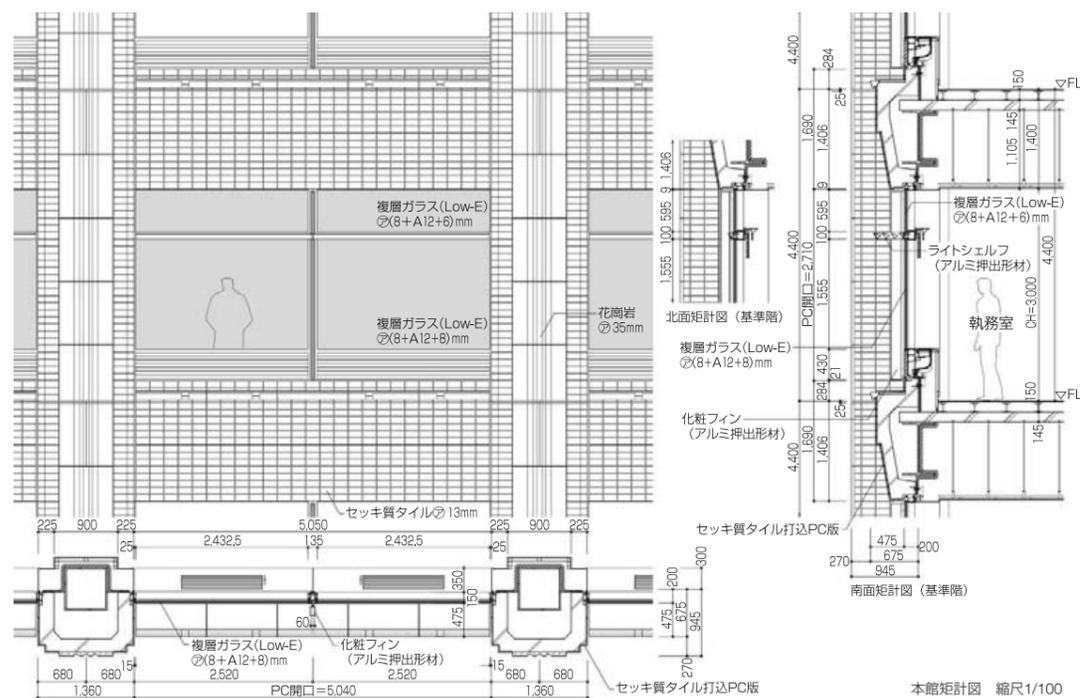
上—県民ロビー吹抜け
下—光庭（9階）



配置図 縮尺1/3,500



本館南面外観見上げ シングルスキン部。彫りの深いPC版にアルミとステンレスのライトシェルフを組み合わせている。タイルは目地の深い施軸タイプ。タイルと石材による構成は日本庁舎のファサード表現を継承したもの



Design + Technique

Best Equipment

時代を継承 次代につなぐ

森 林兵衛
RIMBEI MORI

「栃木県庁舎」の新築計画は、宇都宮市の中心市街地の活性化を図る重要なプロジェクトとして、市中心部にある既存県庁敷地内での建替計画であった。

旧県庁には、地元栃木県出身の佐藤功

一氏設計で1938年に竣工した旧本庁舎（実は、この建物は栃木県庁舎としては4代目に当たる。ちなみに3代目は片山東熊氏の設計だったが、1936年に火災によって消失した）、第二庁舎、旧東館、それに、大高正人氏設計の旧議会議事堂と屋外駐車場が、敷地全体を使って配置されていた。

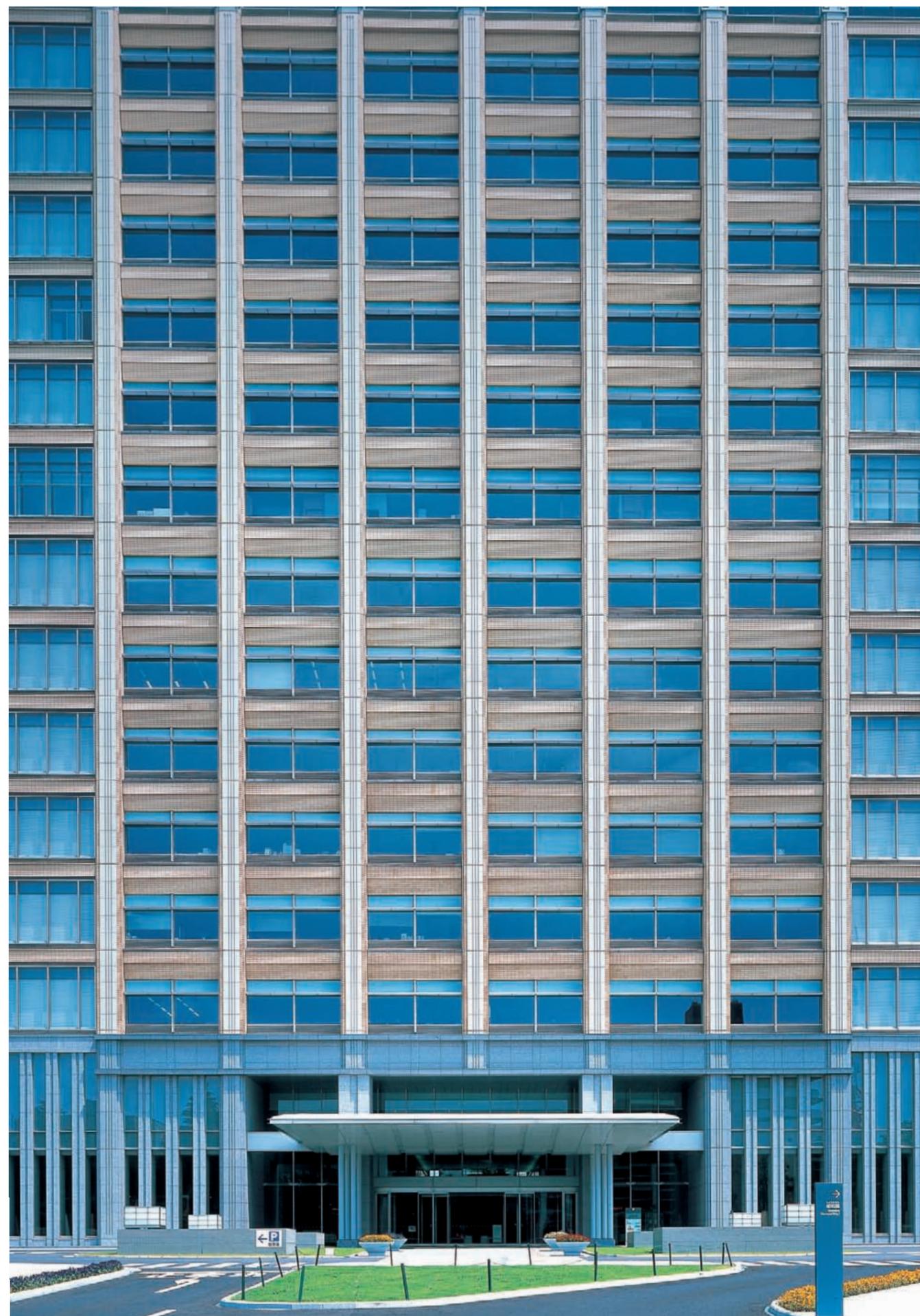
新庁舎に求められていた諸条件を満たすためには、従前の約8倍の延べ床面積が必要であった。耐震補強をして既存の建物を継続使用する計画も検討されたが、限られた敷地の中での施設計画には、多くの点で無理があった。次世代につな

ぎ、使いやすい庁舎とするためには、解体し、更地にして計画することが最善の解決策と判断され、建て替えによる建設計画となった。

当然のこととして、旧庁舎のネオロマネスク様式の、端正な中にも温かみのある姿に親しんだ県民の方々から、保存の声が上がった。もとより、新庁舎の設計は、県民の方々に親しまれてきた街並みの景観を継承しつつ、新しく、開かれた県庁とすることが設計の重要なテーマであった。各方面から検討された結果、旧庁舎の正面玄関まわりの部分を敷地の南東に曳家保存、また旧東館は現在地に残留して旧本庁舎、第二庁舎と旧議会議事堂を解体し、新庁舎の計画をすることになった。

本館の外観デザインは、長い間県民に親しまれてきた、曳家された旧本庁舎（昭和館）のイメージを踏襲しつつ、隣接して建つ警察本部庁舎とも調和させる必要があった。旧本庁舎正面の石材とタイルの組み合わせによる彫りの深い構成、袖部におけるフラットな表現を、現代に換骨奪胎^{かみこつだつたい}【*】することが設計の目標であった。

彫りの深いPC版に軽快なライトシェルフを組み合わせたシングルスクリンの部



本館エントランス



ファサードの隅角部分および東西面は、日射負荷を考慮しダブルスキンとなっている



県民ロビーから登り庭を見る。奥は東館

本館展望階トイレ



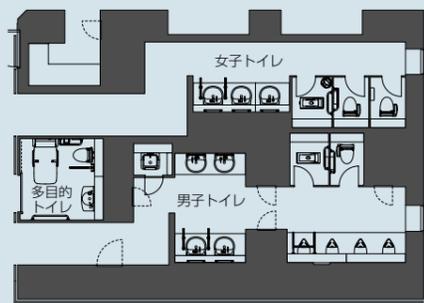
男子トイレ ●INAX使用商品●洗面器：L-2094CS、水栓金具：AM-97K、水石けん入れ：KF-24KM、洗面カウンター手すり：BB-KC2、小便器：AWU-506R、手すり：KF-701E、和風大便器：C-260U、タッチスイッチ：OKC-2BP、紙巻器：CF-62HS、手すり：KF-910E60



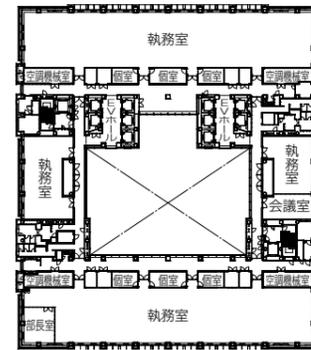
多目的トイレ ●INAX使用商品●大便器：C-22PURC、タッチスイッチ：OKC-2BP、シャワートイレ：CW-E41-CK、大型リモコン：CWA-61K-NK、紙巻器：CF-A23P、手すり：KF-920、はね上げ手すり：KF-480EH70、背もたれ：KFC-270T2、身障者用洗面器：S-275FCRS、水栓金具：AM-51UK、水石けん入れ：KF-24BN



女子トイレ ●INAX使用商品●大便器：C-22PURC、タッチスイッチ：OKC-2BP、シャワートイレ：CW-P22F-TU-C、紙巻器：CF-62HS、手すり：KF-920ER60他



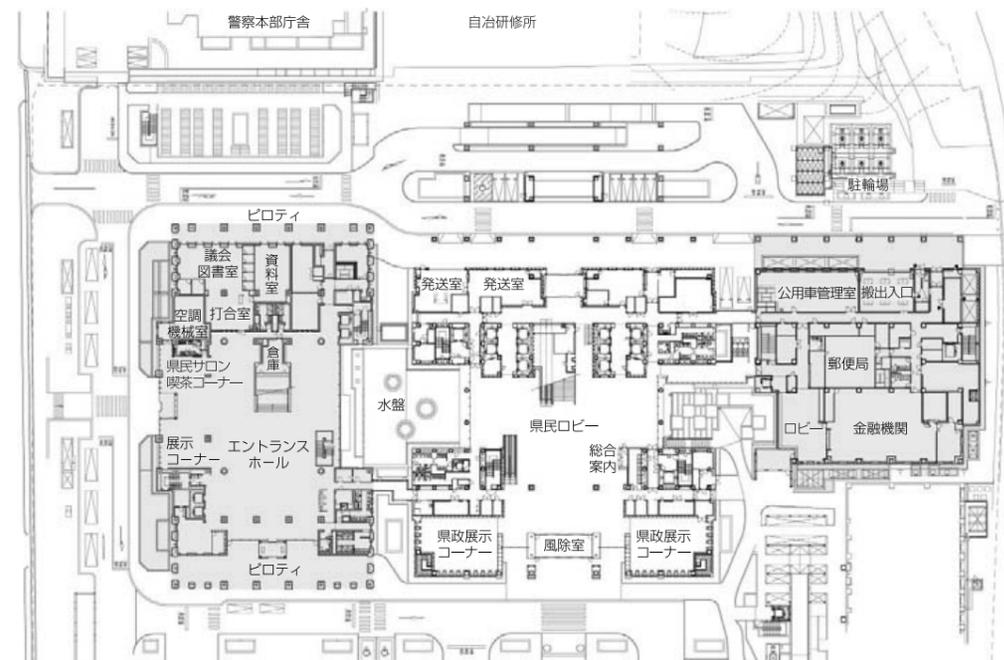
トイレ平面図 縮尺1/200



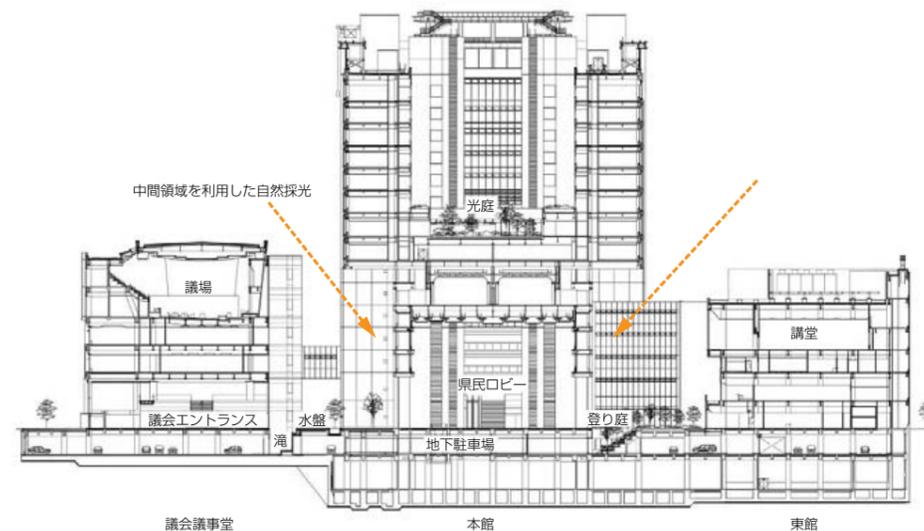
本館基準階平面図 縮尺1/1,400



南面全景



配置図兼1階平面図 縮尺1/1,400



東西断面図 縮尺1/1,400

■建築概要

名称：栃木県庁舎本館
 所在地：栃木県宇都宮市埴田1-1-20
 設計：日本設計
 施工：戸田・清水・大林・中村・渡辺・東武・浜屋・磯部特定建設工事共同企業体
 敷地面積：36,158㎡
 建築面積：14,344㎡
 延床面積：97,370㎡
 規模：地下2階、地上15階、塔屋2階
 構造：S造、SRC造
 工期：2004.10～2007.12
 ●INAX使用商品●FC-210Y/カタリブ/L0571-561,562,563 (13:2:1 Mix) (t=18)

分と、フラットなダブルスキンの部分による構成は、環境への配慮、すなわち日射負荷の大きな東西面、隅角部は断熱効果の高いダブルスキンにするという省エネルギーのシステムにも合致している。このことで、壁面が分節化され、量塊感を和らげることが可能となった。

タイルの色調や形状、テクスチャーの決定には長い期間を要している。新築時をもってして完成ではなく、年月を経た時に県庁全体の雰囲気統一されるような色調・タイルの調合パターン（ばらつき）を、現場でのモックアップ作成を繰り返して模索した。また、設計時点では合決りであったタイル形状は、検討の過程でPCへの打設が困難であること、ノロが外に漏れ出してしまう恐れがあることなどが分かった。タイル面の凹凸感を再現するため、全体の寸法調整を行った上、タイル形状は片リブタイプに変更された。

また、この庁舎は「100年県庁」として設計しているが、官公庁建築の常として、高い頻度でのメンテナンスは期待できない。表面の汚れを最小限に抑えるために、タイルは施釉タイプとし、水切りなどのディテールには細心の注意を払った。

光庭側のタイルについては、代表的県産品である大谷石の露天掘りの採掘場をイメージした明るい色調のものである。インテリアの県民ロビーは、地下採掘場を意識し、産地の異なる大谷石を積層させた、広がりや深みのある空間とした。大谷石のテクスチャーを意識した割肌タイルは、PCに打ち込みづらいためであるが、特に横の目地の通りには注意しながら積層させている。

水まわりは、場所の分かりやすさ、明るさ、使い勝手、メンテナンスのしやすさなどを考慮して、シンプルでゆとりの

ある設計とした。多目的トイレについては、工事中に「誰もが使いやすい県庁舎検討会」（バリアフリーの検討会）が3度にわたって開催され、実際の利用者の立場に立った調整を行った。市内の体育館に実物大モックアップを製作し、視覚障害者・聴覚障害者・オストメイトなど、各種団体に実際に触れてもらった上で意見聴取を行った。器具やボタン、表示サインの位置についても1cm単位での調整を行っている。

【*】（骨を取り換え胎児を取って自分のものとする）から先人の詩文の発想や表現などをもとにし、創意を加え、独自の作品をつくり上げること

もり・りんべい—1942年生まれ。北海道大学農学部農業経済学科、工学部建築工学科を卒業後、日本設計入社。取締役第一建築設計群群長、常務執行役員監理コスト設計群群長を歴任。栃木県庁舎設計・監理室長を経て、現在、UIA2011東京大会日本組織委員会事務局統括幹事。主な作品：かながわサイエンスパーク（1989）、栃木県警察合同庁舎（1996）など。